

## チョコレートカップの変遷と流通

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23957">http://hdl.handle.net/2297/23957</a>

## チョコレートカップの変遷と流通

野上 建紀 (有田町歴史民俗資料館)

### はじめに

エチオピア原産とされるコーヒー、中国南部が原産地と推定されている茶、そして、中米から南米にかけての地域を原産地とするチョコレートは、それぞれの原産地周辺で、嗜好品として、あるいは薬品として愛飲されていた。

そして、16～17世紀にかけて、東アジアから茶、西アジアからコーヒー、新大陸からチョコレートがほぼ同時期にヨーロッパに持ち込まれ、普及していった。コーヒーの飲用文化は中東からトルコを介してヨーロッパにもたらされたと推測されているが、茶とチョコレートは、大航海時代を迎えて、アジア貿易や新大陸貿易の中でヨーロッパに持ち込まれた。

本稿ではこれらを飲用したカップ、特にチョコレートカップについて、その変遷と流通を考察したい。

### 1 絵画資料等にもみるチョコレートカップ

コーヒーと茶、チョコレートは、それぞれ片手で持てるカップで飲用した。チョコレートカップとはどのようなものか、まず当時の絵画資料等をみる。

リオタール (Jean-Etienne Liotard [1702-1789]) が描いた「チョコレートを運ぶ少女」(1743-1745頃)をみる。少女が盆の上に磁器製と思われる把手付きのチョコレートカップと水が入ったガラスカップを載せて運んでいる。チョコレートカップは、コーヒーカップやティーカップに比べると器高が高く、「マンセリーナ」とよばれるカップを固定できる受台付きの皿の上のせられているようである。マンセリーナは1673年にチョコレートがこぼれても皿で受けられるように、底が丸いヒョウタンをのせる受台をつけた皿を発明したと言われるメキシコの副王マルケス・デ・マンセーラの名に由来するという (八杉 2004, p188-189)。こぼれたチョコレートを皿で受けるだけでなく、通常のカップに比べて重心が高いチョコレートカップが受皿上で倒れないようにする工夫でもあったのであろう。

チョコレートパーティーの様子を描いたスペイン陶板画もよく知られている (加藤・八杉 1996, p13)。噴

水の周りで貴族がチョコレートを楽しんでいる姿が描かれている。下膨れの洋梨形をした容器で固形のカカオのペーストを湯煎で溶かして、チョコレート飲料としている様子がわかる。そして、受皿の上のせられた縦長のチョコレートカップに注がれ配られている。カップの把手は確認することができない。

18世紀の静物画には皿の上にパンとチョコレートカップ、かきませ棒付きの銅製ポットが描かれているものがある (加藤・八杉 1996, p17)。カップに把手は見えないが、背後に隠れているだけかもしれない。一般的なコーヒーカップよりは器高が高い。

フランスの18世紀の銅版画では、テーブル上に置かれたチョコレートカップに手を伸ばす女性が描かれている (加藤・八杉 1996, p107)。チョコレートカップは背の高いもので把手が付き、受皿の上のせられている。そして、チョコレートカップの側にはかきませ棒付きのポットが描かれている。

オランダ連合東インド会社による1758年の注文書には、図案付きでチョコレートカップ10,000個の注文が見られる (Fig. 1)。注文書には3種類のチョコレートカップの注文が見られる (三杉 1986, p155)。一つは染付製品、一つはチャイニーズ・ジャパニーズ (チャイニーズ・イマリ)、そして、もう一つは多彩色 (エナメル) である。そして、把手付きと註が加えられている。図案を見ると、その他のコーヒーカップやティーカップに比べて縦長の把手付きチョコレートカップが描かれている。把手は丸耳形のものや折れ杖状のもの2種類が描かれている。

以上、絵画や図案に見るチョコレートカップを見てきた。把手が付くものと付かないものが見られるが、一般のカップに比べて器高が高いことが共通する特徴である。

### 2 沈没船資料からみたチョコレートカップの変遷

沈没年代が明らかな沈没船資料に含まれているチョコレートカップをみていく。1600年代初頭に沈んだサン・ディエゴ号 (1600年沈没)、ヴィッテ・レウ号 (1613年沈没) などでは確実にチョコレートカップと思われるものは確認できない。ヴィッテ・レウ号では径の割に器高の高いカップが見られるが、その器高は4cm程度であり、チョコレートカップとするには小さいように思う。

南シナ海で発見されたとされるハッチャー・カーゴは1640年代頃の陶磁器が主体である (Colin Sheaf, Richard Kilburn 1988)。器形はチョコレートカップと同様のものが見られるが、ややサイズが小さく、チョコレートカップと断定することは難しい。その中で外面に興味深い文様が描かれている縦長のカップがある (Fig. 2)。器高は7cmであり、やや小さめであるが、外面の文様が枕絵であることに注目したい。『メキシコ征服記』を記したベルナル・ディアス・デル・カステイリヨ (1496-1584) は、カカオについて「この飲み物は女と交わるために飲むと聞いた」と記し、精力剤として飲まれていたことを記録している (八杉2004, p10)。また、後述する廣川獬による『蘭療方』や『蘭療薬解』にもカカオはインポテンツの治療薬や回春剤として記されている (八杉2004, p195-197)。ハッチャーカーゴの資料に見られるカップの枕絵の図柄は、カカオの効能と関わりがあるのかもしれない。

コンセプション号は1641年にドミニカ沖で沈んだスペイン・ガレオン船である。一部の陶磁器しか紹介されていないが、縦長のカップが含まれている (ボーデン1996)。写真のみの紹介で正確な大きさが不明であるが、チョコレートカップである可能性が高い (Fig. 3)。小さな把手 (耳) も付いているようである。高台内には「大明成化年製」の銘が見られる。

1690年代の一括資料と推定されるブントオ・カーゴの陶磁器資料の中にチョコレートカップと思われる製品が含まれている (Fig. 4)。蓋付、受皿付である。類品として「L'Empire de la vertu est établi jusq'au bout de l'univers」と銘が入るものが紹介されている (C.J.A.Jörg., Michael Flecker 2001, p60)。

碗礁1号沈没船遺跡は17世紀末と推定されている (碗礁一号水底考古隊2006)。受皿付きのチョコレートカップが見られる (Fig. 5)。把手は見られず、蓋も紹介されていない。

カ・マウ沈没船遺跡は、ベトナムのカ・マウ沖に沈んだ船である (Nguyen Dinh Chien 2002)。1720-1730年代と推定されている。把手付きのチョコレートカップの可能性をもつカップが紹介されている (Fig. 6)。

ヨーテボリ号は、アジア貿易の帰途、1745年にヨーテボリ沖に沈んだスウェーデンの東インド会社の船である (Berit Wastfelt *et al* 1990)。カップアンドソーサーが数多く発見されている。その中にはチョコレート

カップも含まれている (Fig. 7)。把手があるものとないうものがあるが、把手付きのものは高さ6.3cmと器高が低く、チョコレートカップでない可能性も考えられる。

ヘルデルマルセン号は1752年に沈没したオランダ東インド会社の船である。コーヒーカップ、ティーカップ、チョコレートカップが多数発見されている (C.J.A.Jörg. 1986, Christie's Amsterdam 1986)。チョコレートカップは3種類見られる。染付、チャイニーズ・イマリ (染錦)、色絵の3種であり、いずれも把手がつく (Fig. 8)。1758年度の陶磁器請求書にある3種類のチョコレートカップがそれぞれ相当すると思われる。

グリフィン号は1761年にフィリピンのグリフィン瀬で沈んだイギリスの東インド会社の船である (Franck Goddio *et al* 1999)。側面の片側あるいは両側に把手がついたチョコレートカップが発見されている (Fig. 9)。

以上の沈没船資料に見られるチョコレートカップからその変遷をまとめてみる。1640年代には、チョコレートカップが出現した可能性がある。コンセプション号の製品を見ると、把手あるいは耳がついたものである可能性があるが、まだ一般的ではない。1690年代には受皿や蓋を伴うものが現れ、18世紀中頃には把手付きのものが一般的となるようである。

ここでカップ類の把手について考えてみたい。松下久子は把手がついたコーヒーカップ等の生産はヨーロッパの磁器窯によって始められ、遅れて中国磁器の中にも把手付きのカップの生産が始まったとする (松下1995, p40-41)。また、大橋康二によればこの時期はチョコレートカップのみ把手がつき、コーヒーカップやティーカップには把手がつかないという。松下は18世紀前半におけるヨーロッパの磁器窯の把手付きカップを二例紹介しているが、いずれも器高が高いものである (松下1995, p40)。ヘルデルマルセン号の資料もチョコレートカップと見られる器高の高いカップには把手がつくものの、コーヒーカップやティーカップには把手はついていない。大橋が指摘するように中国の輸出磁器の中では、チョコレートカップには把手がつき、コーヒーカップやティーカップには把手がつかないことが一般的であることは確かなようである。一方、コーヒーカップやティーカップの同サイズ、同形のカップに把手がついた図も見本図にはある。1758

年度の陶磁器請求書にコーヒーカップについて「必ず把手のない事」と繰り返し注意書きしていることも逆に把手付きのコーヒーカップが存在することを示唆する。そして、松下は把手付きカップのように小さくて複雑な形状の製品は破損しやすく、長い船旅による輸送に向かない商品であったと考え、なるべくリスクの大きな商品を扱うことを避けたと推測する（松下 1995, p41）。把手については、カップ類ではないが、1758 年の史料には唾壺の注文に関して、「取消しの事、取手が破損しやすく、使用量が少ないため」とある。また、ミルク碗の注文についても、「取り消しの事、到着品の大部分が、常に破損しているため、更に在庫品多数あり。従って利益極少のため」とある。ミルク碗については把手に関する記述はないが、ヘルデルマルセン号で回収されているミルクボールには把手がついている。大部分が常に破損しているとはあるのは、把手部分である可能性が高い。把手があってもなくても構わないようなものであれば、破損率を考えて把手をつけないように注文している可能性は考えられる。

そして、前掲の 1761 年のグリフィン号の資料を見ると、器高の高いチョコレートカップと推測されるものには、側面の片側あるいは両側に把手がつくのにに対し、その他の器高の低いカップの場合、口縁を輪花状に細工したカップを除いてほとんど把手がついていない。1773 年のロイヤルキャプテン号の資料の中には器高の低いカップに把手がつくものがみられる。コーヒーカップあるいはティーカップであろうと思われる。そして、1797 年のシドニー・コープの資料の中にはティーカップの把手部分があり、1817 年のダイアナ号の資料の中には把手付きの小さいマグカップ形のカップアンドソーサーが大量に含まれている。

よって、1760 年代頃からは量的には少ないものの中国磁器のコーヒーカップやティーカップにも把手がついたものが輸出され、19 世紀には把手がつくことが一般化していくのではないかとと思われる（野上 2002）。

### 3 有田で生産されたチョコレートカップ

日本で最も古いチョコレートの記録は、廣川獬の『長崎聞見録』（1797）である（八杉 2004, p195）。「しょくらとをハ紅毛人持渡る腎葉にて、形獣角のごとく、色阿仙葉に似たり（後略）」とある。廣川獬は『蘭療方』や『蘭療薬解』でもチョコレートを扱っているが、

チョコレートは「私欲刺壘多」と記されている（八杉 2004, p195）。

八杉佳穂は鎖国以前にチョコレートを飲んだ可能性がある日本人について、いくつか可能性を列挙している（八杉 2004, p198）。以下にそれらを紹介する。

鎖国以前、マニラには日本町が形成されており、多くの日本人が住んでいたため、ガレオン船でメキシコからマニラへチョコレートが渡ってきていれば、彼らが飲んだ可能性がある。また、マニラから日本へチョコレートがもたらされていた可能性もある。ただし、これらについては記録がない。

その他、メキシコやヨーロッパで飲んだ可能性が考えられるのは天正の少年遣欧使節団と慶長遣欧使節団、17 世紀初頭に渡墨した田中勝助らであるが、八杉はこれらの可能性について、天正の少年遣欧使節団は西回りであり、ヨーロッパで流行する前なので可能性が低いとする。一方、慶長遣欧使節団の支倉常長らは 1613 年に石巻を出帆し、太平洋を横断してメキシコに至り、そして、大西洋を渡ってスペイン、ローマを訪れており、メキシコなどで飲んだ可能性が高いとする（八杉 2004, p198-199）。また、1609 年に上総沖で遭難したサンフランシスコ号に乗船していたビベロの帰墨をとらえ、メキシコに渡った京都の商人田中勝助らも飲んだ可能性が考えられる（八杉 2004, p199）。

それではチョコレートカップはどうか。17 世紀初めに有田で磁器生産が始まるが、17 世紀前半にはまだチョコレートカップの生産は見られない。そのため、天正の少年遣欧使節団、慶長遣欧使節団や田中勝助、あるいは、マニラの日本町の日本人がチョコレートを飲用していたとしても有田焼によるチョコレートカップの生産はそれらとは直接関わりを持たない。

オランダ連合東インド会社による大量注文が始まるのが 1659 年であり、チョコレートカップの生産もその頃からである。コーヒーカップの生産もチョコレートカップの生産開始と同じ頃か、やや先行して 1650 年代頃に始まる。有田の赤絵町遺跡では 17 世紀後半～18 世紀前半にかけてのコーヒーカップ等のカップ類が数多く出土している（Fig. 10）。赤絵町遺跡で出土する製品のほとんどは内山地区の窯場で生産されたものである。そして、コーヒーカップに比べて量は少ないが、チョコレートカップも出土している。17 世紀後半の製品と推定されるものは、白磁製品、瑠璃釉と

透明釉の掛分製品である。把手は付いていない。また、それらに確実に伴う受皿や蓋は確認されていない。一方、17世紀末～18世紀前半の製品と推定されるものは、いずれも金襴手様式の染錦製品である。把手は付かないが、受皿や蓋は見られる。ただし、受台がつくマンセリーナは確認できていない。

そして、海外ではメキシコシティ（メキシコ）、アンティグア（グアテマラ）、ハバナ（キューバ）、カディス（スペイン）などで出土例が確認されている。これらの都市はマニラ・ガレオン交易ルート上などに位置しており、これらはスペインのガレオン船で運ばれた可能性が高い。それでは、鎖国政策により交易関係になかったスペインのマニラ・ガレオン交易でどうやって有田焼が運ばれたのか。2004年から2006年にかけてのマニラ、台湾、マカオ、メキシコシティ出土陶磁器の調査によって、有田焼が唐船によって台湾経由でマニラにもたらされ、さらに太平洋を横断していたことが明らかになった（野上ほか2005、2006）。さらに方真真のマニラの税関記録に関する研究（方真真2006）によりチョコレートカップがマニラへ輸入されていた記録も明らかになっている。すなわち、1682年に1,000個のチョコレートカップ（*Ytten mill escudillas de chocolate*）が台湾からマニラに持ち込まれている（方真真・方淑如2006, p202）。産地の別は記されていないが、1682年の記録は1684年の展海令以前のものであり、有田焼であった可能性が考えられる。それらの一部はマニラで使用され、一部は太平洋を渡っていったのであろう。

#### 4 「茶の道」と「チョコレートの道」

カップ類の中でチョコレートカップが占める割合をみる。C. J. A. Jörgによるヘルデルマルセン号の公式記録には、紅茶カップ63,623個、コーヒーカップ19,535個、チョコレートカップは9,735個とある。コーヒー碗：紅茶碗：チョコレート碗の比率は、21.0%：68.5%：10.4%である。そして、前掲の1758年度陶磁器製品の請求の内容は次のとおりである。

##### 1758年11月16日付「1758年度陶磁器製品の請求」

###### ①コーヒーカップ

コーヒー・ハウス用受皿付カップ 10,000個（絶対に把手のつかない事）

コーヒー・ハウス用受皿なしカップ 30,000個（必ず把手のない事）

オランダコーヒーセット 14,000組

オランダ精選コーヒー・セット 130,000個

###### ②紅茶カップ

大型オランダ紅茶セット 35,000組

中型・大型オランダ紅茶セット 76,000組

###### ③チョコレートカップ

ココア用カップ把手付 10,000個

（内訳：染付6,000個、チャイニーズ・ジャパニーズ3,000個、多彩色1,000個）

カップ類を合計すると、コーヒー碗184,000個、紅茶碗111,000個、ココア碗10,000個である。その比率をみると、コーヒー碗：紅茶碗：チョコレート碗＝60.3%：36.4%：3.2%である。1752年のヘルデルマルセン号の公式記録と1758年の陶磁器請求書の数字にはやや差があるが、いずれもカップ類の中でチョコレートカップが主流を占めることはない。この傾向は生産地（有田）における嗜好品のカップ類の中でチョコレートカップが占める割合やその他の沈没船資料の中でチョコレートカップが占める割合からも認めることができる。全体的な需要の割合を示していると言ってよいと思う。チョコレートが、コーヒーや茶とほぼ同時期にヨーロッパに輸入されるようになりながら、嗜好品飲用としての競争に敗れたこともその一因であろう。

一方、そうした割合と対照的な割合を示しているのが、マニラ・ガレオン交易ルート上の遺跡である（Figs. 11～15）。カップ類の中でチョコレートカップが占める割合が非常に高い。沈没船資料の中でもガレオン船であるコンセプション号のみカップ類はチョコレートカップが主体である可能性をもつ。大橋康二はキューバの出土陶磁器の写真の観察からチョコレートカップの割合の高さを指摘したが、その傾向はキューバだけではなく、マニラやメキシコでも同様であり、また、中国磁器だけでなく、ヨーロッパ陶器、プエブラ焼など東洋磁器以外の陶磁器を含めても同様の傾向を示している。方真真によれば、1685～1687年の間だけでも少なくとも48,080個のチョコレートカップがアモイなど中国の港を出帆した船によって、マニラに輸入されている。そして、前述したように有田焼の

チョコレートカップもマニラ・ガレオン交易ルート上で発見されている。有田焼自体、そのルート上で発見されている事例がまだ少ない中で有田焼のチョコレートカップが発見されている頻度は特筆すべきものである。生産地の有田におけるチョコレートカップの割合から考えても同様である。太平洋を渡った有田焼の主要輸出品として、染付芙蓉手皿を挙げられるが、それに次ぐものとしてチョコレートカップをあげてよいと思う。

中南米はカカオの原産地であり、カカオは薬、飲み物、貨幣、貢納・交易品として文化の中に深く根付いていた。侵略したスペインもまたカカオを飲用し、当初はその貿易も独占していた。コーヒーや茶に嗜好飲料としての普及競争で破れた後も新大陸やスペイン本国ではチョコレートの飲用習慣が他国よりも浸透していたのであろう。

インド洋を横断してヨーロッパに向かう予定であったヘルデルマルセン号などの積荷の中で茶は重要な地位を占めていた。インド洋がティー・ロードであるならば、大西洋はまさにチョコレート・ロードであり、太平洋を横断した東洋の磁器もその文化の彩りの一部を担っていたのである。

#### 参考文献・引用文献

- 加藤由基雄・八杉佳穂 1996 『チョコレートの博物誌』小学館
- トレイシー・ボウデン 1996 「ドミニカ沖に沈んだ17世紀の帆船 “金銀財宝を回収”」『National Geographic』1996年7月号日経ナショナルジオグラフィック社 p122-137
- 野上建紀 2002 『近世肥前窯業生産機構論 - 現代地場産業の基盤形成に関する研究 -』
- 野上建紀・Alfredo B. Orogo・Nida T. Cuevas・田中和彦・洪曉純 2005 「ガレオン船で運ばれた肥前磁器」『水中考古学研究』創刊号 p104-115.
- 野上建紀・Eladio Terreros・George Kuwayama・Jose Alvaro Barrera Rivera・Alicia Islas Dominguez・田中和彦 2006 「太平洋を渡った陶磁器 - メキシコ発見の肥前磁器を中心に -」『水中考古学研究』第2号 p88-105
- 方真真 2006 『明末清初台湾與馬尼拉的帆船貿易 (1664-1684)』稲郷出版社 (台湾)

- 方真真・方淑如訳註 2006 『台湾西班牙貿易史料 (1664-1684)』稲郷出版社 (台湾)
- 松下久子 1995 「オランダ東インド会社とコーヒーカップ」『陶説』510 日本陶磁協会 p24-44
- 三杉隆敏 1986 『世界の染付 6』同朋社出版
- 八杉佳穂 2004 『チョコレートの文化誌』世界思想社
- 碗礁一号水下考古隊 2006 『東海平潭碗礁一号出水瓷器』科学出版社
- Berit Wastfelt, Bo Gyllensvard and Jorgen Weibull 1990 *Porcelain from the East Indiaman Gotheborg.*
- C.J.A.Jörg. 1986. *The Geldermalsen History and Porcelain.* Kemper Publishers Groningen.
- C.J.A.Jörg., Michael Flecker 2001. *Porcelain from the Vung Tau Wreck.* The Hallstorm Excavation. Oriental Art, Sun Tree Publishing Ltd, UK
- Christie's Amsterdam 1986. *The Nanking Cargo Chinese Export Porcelain And European Glass And Stoneware.*
- C.L. van der Pijl-Ketel (ed.) 1982. *The Ceramic Load of the 'WITTE LEEUW(1613).* IJKS Museum.
- Colin Sheaf and Richard Kilburn 1988. *The Hatcher Porcelain Cargoes, The Complete Record.* Phaidon Christie's Limited
- Franck Goddio and Evelyne Jay Guyot de Saint Michel 1999. *Griffin, Une Rencontre Avec L'Histoire.* Periplus (London)
- Jean-Paul Desroches, Gabriel Casal and Frank Godio. 1996. *Treasure of the San Diego.* National Museum of the Philippines.
- Kuwayama, George and Pasinski, Anthony 2002. Chinese Ceramics in the Audiencia of Guatemala. *Oriental Art* vol XLVIII No.4. p25-35
- Nguyen Dinh Chien 2002. *Tau Co Ca Mau, The Ca Mau Shipwreck 1723-1735.* Ca Mau Department of Culture and Information. The National Museum of Vietnamese History.
- (e-mail: takenori\_n@hotmail.com)

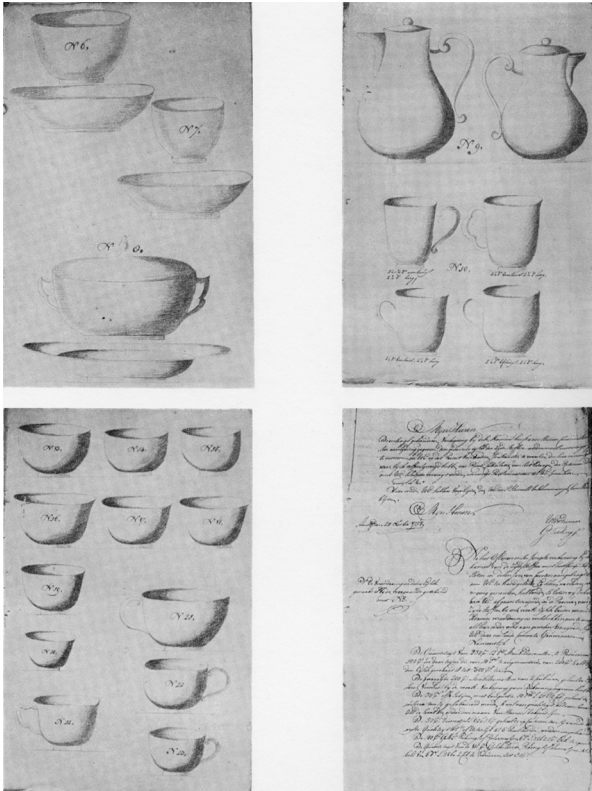


Fig. 1 「1758 年度陶磁器製品の請求」

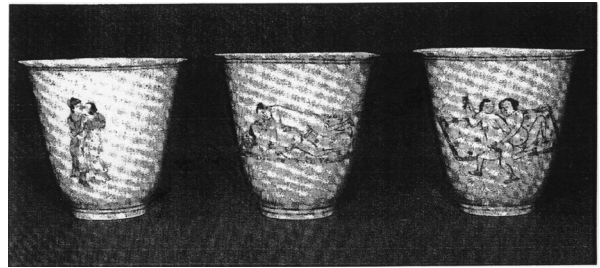


Fig. 2 ハッチャーカーゴ発見磁器碗



Fig. 3 コンセプション号発見染付磁器



Fig. 4 ブンタオ・カーゴ発見染付カップアンドソーサー



Fig. 5 碗礁1号沈船遺跡発見染付カップアンドソーサー



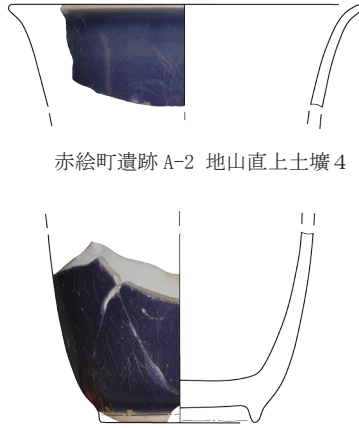
Fig. 6 カ・マウ沈船遺跡発見染付把手付碗







赤絵町遺跡 C-2 地山直上土壌 9



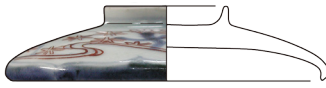
赤絵町遺跡 A-2 地山直上土壌 4



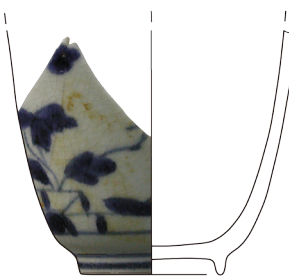
赤絵町遺跡 C-2 地山直上土壌 2



赤絵町遺跡 A-2 地山直上土壌 4



赤絵町遺跡 A-4 2号窯



赤絵町遺跡 A-4 2号窯



赤絵町遺跡 C-2 地山直上土壌 3  
赤絵町遺跡 C-1 4層



赤絵町遺跡 B-2 4B層



赤絵町遺跡 C-3 4層出土ティーカップ?

0 5cm

Fig. 10 赤絵町遺跡出土チョコレートカップ類



Fig. 11 中米・カリブ海地図



Fig. 12 マニラ出土色絵碗  
(Courtesy:National Museum of the Philippines)



Fig. 13 メキシコシティ出土磁器碗 (1)  
(Courtesy:INAH)



Fig. 14 メキシコシティ出土磁器碗 (2)  
(Courtesy:INAH)

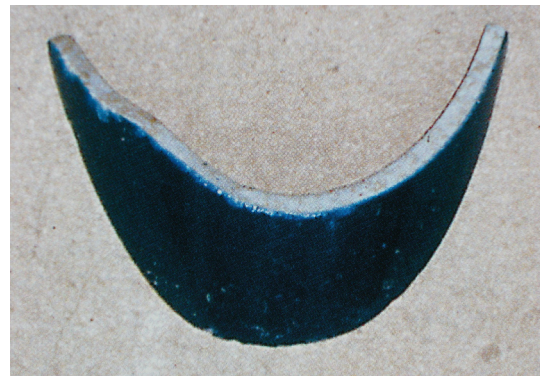


Fig. 15 グアテマラ・アンティグア出土磁器碗  
(G.Kuwayama,Pasinski,Anthony 2002)